

二〇三 吉太郎



三戸吉太郎は、一八六七年広島市に生まれ

た。三歳で父を亡くし、以後母の手で育てられる。貧しかったため苦学し、夜学で学びながら陸軍を志していたころ、偶然、砂本貞吉の話を聞き、キリスト教と出会う。

一八八七年クリスマスに広島で、W・R・ランバスより受洗。翌年、南美以教会派遣の神学生として長崎鎮西学院（加伯利英和学校）へ入学したが、八九年九月関西学院の設立に伴い神学部へ転学し、九六年六月に卒業。その後は多度津、宇和島（現・宇和島中町）、岩国、御影の諸教会を歴任。若い頃から児童の宗教教育を自らの使命とし、日本の日曜学校事業の充実発展に尽くす。日本メソヂスト教

会日曜学校局長、日本日曜学校協会理事などの要職に就く一方、関西学院神学部、ランバス記念伝道女学校（神戸）、ランバス女学院（大阪）で、日曜学校管理法などの講義を担当。一九一八年には、原田の森、関西学院構内に建設されたハミル館で「ハミル日曜学校教師養成所」を開校した。

I はじめに

“SUNDAY SCHOOL” MITO⁽¹⁾—三戸吉太郎その人を一言で表明する、「日曜学校『三戸』」と題された文章がある。三戸が志半ばに倒れ、数ヶ月の闘病の後、五十代後半の若さで亡くなってから、十一年を経て英文で書かれたもので、「三戸吉太郎は、洗礼を受ける前から日曜学校教師だった。」という印象的な書き出しで始まっている。

三戸吉太郎は、生まれ育った広島での若き日に、関西学院創立者となるW・R・ランバスから洗礼を受け、二年後に関西学院神学部が設立されるや神学生となり、卒業後は生涯をメソヂスト教会の伝道者、牧師として歩みつつ、亡くなるまでの十五年は、母校神学部で講師として通った。関西学院草創期を生きた人物である。

しかし、彼は学院の人であると同時にそれ以上に、日本

の宣教史上欠くことのできない、超教派的な宗教教育運動である「日曜学校」の人であった。「日曜学校」三戸、それはとりもなおさず、彼を輩出した関西学院を「日曜学校」、つまり児童の宗教教育と教育伝道へと結びつけることとなった。そこで、学院史上で三戸を取り上げるとは、三戸の日曜学校とは何だったのかを検証する作業でもあると思われる。

三戸は、自分が神と出会って間もなく、「小さな子どもたちを教えることに本気で取り組むことになった。³⁾ 神の呼びかけに応えるとは、彼にとつては、幼い子どもたちに神の愛を伝える、日曜学校で教えることであり、それは生涯一貫していた。

神学生時代から、三戸は、後に牧師として赴任することになる多度津、御影、宇和島をはじめとして各地の教会の日曜学校と深く関わっていた。この時期に、「子供讃美歌」の編集、日曜学校出席時に子どもに配る聖書カードを貼るカード貼の考案、⁴⁾ 児童説教といわれる子ども向けのお話の試みなどをすで行っている。

一八九六年、三戸は神学部を卒業し、多度津教会牧師として赴任することになるが、この年「ハミル博士と日曜學校に熱心な実業家ペッパー氏の招請により」数ヶ月の米國

での日曜学校の視察後、英、仏と欧州の日曜学校事情をも見聞して帰国したという。⁵⁾ また同年には『訓蒙 神の話』⁶⁾ を著す。そこには三戸がいかに子どもたちを理解し、愛し、手法を凝らして神を語っていたかが闡明となっている。

三戸は一八九六〜一九〇〇年の多度津教会、一九〇〇〜〇六年の宇和島教会、⁷⁾ 宇和島辞任後に二度目の渡米を挟んで、その後岩国教会（一九〇六〜〇八年）、御影教会（一九〇八〜二二年）と、赴任した教会へ行く先々で、日曜学校の発展に努め、大きな日曜学校を有することになる。その一方で彼は、教派を越えた日曜学校運動の支え手、担い手となり、他教会の牧師や日曜学校教師たちを、訪問や研修、ユニークな教材開発と配布、⁸⁾ 養成機関の設立を通して助けていく。

世界日曜学校協会のフランク・L・ブラウンは、三戸についてこう語っている。「三戸兄弟は、日曜学校の働きに情熱と非凡な才能を傾け、また、周囲から愛される性格だった。：グループを組織し、人々をひきつけ参加させるために、彼が考えたプランと彼が用いた題材は、わたしの知る限り、東洋一のものだった。」⁹⁾

一九一二年に御影教会牧師を辞し、日曜学校事業に専念してから亡くなるまでの三戸の活動と業績については、数

少ない残された当時の教界諸雑誌から垣間見るほかない。しかしそれらの断片的な記事の中に、三戸独特の「今日の児童が将来の：世界の後継者」であるという児童観やメソヂスト教会固有のJ・ウェスレーに基く教育伝道への強い意識、日曜学校教師養成の集大成ともいえる「ハミル日曜学校教師養成所」の理念などが浮かび上がるように残されている。

II 略歴・業績一覧

- 一八八七年二月二十七日⁽¹²⁾ 父、大鶴彦三、母、住田咲（共に広島藩士の家柄）の三男一女の末子として広島市で誕生。⁽¹³⁾
- 一八八七年 一月 広島教会四季会で勤士に挙げられ、伝道者となる決心をする。
- 二月 W・R・ランバスより受洗。
- 一八八八年 長崎鎮西学院（加伯利英和学校）へ入学。
- 一八八九年 九月 関西学院神学部へ転入。⁽¹⁴⁾
- 関西学院学生時代は、週末多度津へ行き、日曜の礼拝、日曜学校を担当。
- 一八九三年 一月二十九日 三戸吉太郎編『えほばを賛美せよ』メソヂスト出版舎より発行。
- 多度津から帰る大阪商船の佐波川丸が衝突の事故。無事相手汽船に乗り移り救出活動をする。
- 二月 南美以（メソヂスト）⁽¹⁵⁾ 教会は日曜学校局を組織、書記となる。
- 一八九四年 八月 三戸皆由の娘、ヒデ（秀子）と結婚。
- 住田／大鶴から、三戸吉太郎となる。
- 一八九五年 九月 御影教会の日曜学校校長を務める。⁽¹⁶⁾
- 二月二十四日 神戸美以教会（現・神戸栄光教会）日曜学校クリスマス祝会で「勤話」。⁽¹⁷⁾
- 一八九六年 六月 関西学院神学部卒業。
- 七月二十六日 夏期伝道のため宇和島教会へ。
- 米国、欧州の日曜学校へ視察旅行。
- 一〇月 第五期南美以教会日本年會で松山部多度津巡回区に任命、多度津教会第四代牧師に就任。
- 二月 『訓蒙 神の話』（著者・童友）三戸吉太郎、序文・J・C・C・ニュートン、六月（二三日付）教文館発行。

- 一八九九年 南美以教会、広島部内日曜学校大会
五月二五、二七日 で礼拝説教（児童への説教の初の試
みと言われた）を担当。
- 一九〇〇年 宇和島教会牧師に就任。
一九〇六年 四月 宇和島教会牧師を辞任。渡米。
九月 南美以教會第十五期日本年會で任地
指命を受け、岩国教会牧師へ。
- 一九〇七年 五月 三派合同、日本メソヂスト教会に日
曜学校局が設置され幹事となる。
五月一〇、二日 日本日曜学校協会（NSSA）が設立
され、幹事となる。
- 一九〇八年二月 岩国より御影教会牧師に就任。
一九〇九年 四月 関西学院神学部(18)の講師となり、日曜
学校管理法、児童教育学など講じる。
一、一九二五年。
- 一九二二年 三月 御影教会牧師を退任。
四月六、九日 第六回NSSA大会理事会、講演等。
於…日本メソヂスト銀座教会。
五月、六月 朝鮮各地を訪問、講演。帰途福岡で、
福岡日曜学校同盟の成立に関与。
九月二〇日、 仙台で東北日曜学校講習会講師。往
- 一九一三年 二月二〇日 路、復路に福島、秋田、米沢で集会。
『天使の聲』発行。
日本メソヂスト日曜学校局『局報』
を『春光』と改題、編集発行人。
一九一四年 四月二七日 関西学院理事会で日本メソヂスト教
会日曜学校局よりの申し出を協議。
八月四、六日 日本メソヂスト教会日曜学校局は、
第一回西部少年夏期学校を神戸の関
西学院神学館で開催(21)。日本初の夏
期聖書学校となる。
一九一七年 一月七日 東京五部連合SSS教師講習会講師。
一九一八年 五月 ハミル館定礎、翌年夏竣工。
五月五、九日 神戸教会で賀川豊彦、藤田時子と六
週連続の教会学校教師講習会講師。
九月、一〇月 ハミル館で少年少女夏期学校開催。
一〇月 一日 中国及び九州四国の一部を巡回。
一九一九年 九月、一〇月 ハミル日曜学校教師養成所開校。
一〇月 一日 日本メソヂスト教会日曜学校局の局
長となる。NSSAの理事に就任。
一九二〇年 一月 第八回世界日曜学校大会開催。
一九二二年 八月 鶴飼猛と「支那、満州、朝鮮」を巡回。

一〇月

第一回東京部通常部会回心運動協議会で奨励。

二月二日、八日

京城にて朝鮮主日學校大會開催。

一九三三年 四月

この年度よりハミル館の日曜学校は関西学院教会の所屬となる。

一九三三年

ランバス女学院で「個人伝道」を講義。⁽²⁴⁾

二月

編集発行人を務めていた日本メソヂスト教会日曜学校局『教師之友』が十二月号で終刊。

一九三四年 一月

『教師之友』がNSSAの『日曜学校』と合併。

一九三五年 二月

病氣のため日曜学校局長を辞任。⁽²⁵⁾

五月 二日

午後十時四十分逝去。⁽²⁶⁾

五月 四日

御影教会堂にて告別式施行。

III おわりに

三戸の死の翌年、西部年会記録に書かれた三戸の略歴には、「兒童宗教々育事業を自己の天職と自覚」し、三十年以上を一心に「我が国日曜学校の指導者として東奔西走、寢食を忘れて斯業の充実発展に尽瘁せらる」とある。⁽²⁷⁾ 特

に御影教会牧師を辞してからの十三年間は、全国各地、中国、朝鮮へも日曜学校事業のために訪れ、教案誌の発行と教師養成によって日曜学校教師を支えながら、神学教育の中で宗教教育の重要性を講じた日々であったことがうかがえる。

しかし、日曜学校に賭け、兒童に生きることは、容易いことではなかった。宇和島教会での弟子尾崎和夫は「先生が日曜学校運動を唱導せられた当時に於ては、日曜学校といへば問題にされず、ある場合には軽蔑的な態度さへも投げかけられていた」とし、三戸がしばしば、「三戸は婦人科、小兒科専門だ」なんての冷笑を浴せられた」と語っていた⁽²⁸⁾。実際、牧会する教会を持たずにこの事業の専従者として生きるという決断は、後に多大な苦難を招くことになる。三戸の死後、一家の生活は困窮し、資産家であった妻ヒデの三戸家の援助も底をつくほどだったという。

日曜学校や子どもが置かれたこのような嘲笑的、差別的な環境の中で、三戸は黙々と全国の教会の現場を行脚し続けた。一方で、彼はこの尊い事業を、教会の教職者たちが「本気で取り組む」べき業とするために、ハミル館を建てることを構想したのではないかと思われる。関西学院構内にハミル館事業を据える、それは兒童と宗教教育をメソヂ

スト教会の神学教育ならびに学院、神学部と深く結びつけ
る幻^{ツジヨシ}から計画されたことだと思われる。ならない。

ハミル館での幼稚園、日曜学校事業を今日に継承する関
西学院教会の年史は次のように語る。「ハミル館の企画、
運営は実質的には日本における宗教教育の開拓者である三
戸吉太郎が専らこれに当たったもので、彼の熱心がこの建
物と事業を成立させたといつても過言でない。ハミル館は
かくてスタートしたのであるが、その推進の中心の三戸吉
太郎は過労で健康を害し活動できなくなり、そして教師養
成所の事業も進展できなくなり、挫折に至った。」⁽²⁹⁾

三戸の死から一ヶ月、一九二五年六月六日、日本メソヂ
スト教会日曜学校局は、「ハミル館の所有は局に属するが、
使用・運用している神学部に対して、ハミル館を宗教教育
の目的のために神学部に移管すること、…本や地図などの教
材は神学部の図書室に移管すること」を依頼する。その後、
一九二七年ハミル館の上ヶ原移転が決議され、一九二九年
には「関西学院理事会は、ハミル館とその設備を関西学院
が所有・管理し、キリスト教教育の目的あるいはキリスト
教教育と矛盾しない目的のために使用してもらうために提
供する、という日本メソヂスト教会日曜学校局の申し出を
受け入れることを決議した」⁽³⁰⁾のである。

学院の歴史に刻まれた三戸の使命と幻は、メソヂスト教
会と関西学院にどのように残され、また受け継がれている
のだろうか。三戸の足跡を辿ることが、彼の命懸けの願い
を今日再考、再興する一助となればと思ふ。

【参考資料】

「神戸に新設せらる、日曜学校教師養成所」

日曜学校教師養成所は大正七年十月一日を以て開始す 本事
業は日本メソヂスト教会日曜学校局と協同し関西学院神学部専
ら其教育の任に當る 是れハミル館事業の一節にして又関西學
院神学部の一科たり。

ハミル館は関西學院構内に在りて日曜学校局の所有に属し前
記教師養成所の外、日曜学校局事務室、日曜学校参考品室、日
曜学校図書室、春光社、模範日曜学校を有す 基督教會員は教
派の如何に拘らず男女とも等しく入學するを得。

學科は一年を以て全科を成すと雖も一ヶ年を三學期に分ち各
學期の課程は其學期毎に完結するの組織なるが故に學修の順序
は何れの學期より始むるも三學期を以て全科を修了するの便を
有す。

教授及講師姓名左の如し、

松本益吉氏、吉崎彦一氏、田中義弘氏、曾木銀次郎氏、岡島
政尾氏、三戸吉太郎氏、横川四十八氏、久留島武彦氏、村上

鋭夫氏、エス・エス・スチュワート氏、松本春枝氏、亀徳一男氏、其他数名。

當局者は本事業をして実際に適し且つ裨益あらしむる為に其勞を惜まざるべし。牧師、宣教師、教會、日曜學校は所屬の教師及役員を改善せんため教派の如何に拘らず大に此機會を利用せられんことを切望す。

尚詳細なる事は関西學院神学部長ヘーデン氏宛或はハミル館内日曜學校局幹事三戸吉太郎氏宛て照会せられたし。

『日曜學校』第五十号（一九一八年九月一日 日本日曜學校協會發行）三十五頁。

【注】

(1) Miss Katherine M. Shannon, "SUNDAY SCHOOL," MITO, 50th Anniversary Year Book of the Japan Mission (MECS), 1936

(2) 山本忠興・日本日曜學校協會編纂『日本日曜學校史』（日曜世界社 一九四一年）四二頁では、三戸は「六十歳をもつて天に召された」とされているが、生年についての諸説（注9に後述）のどれをとつても満六十歳を迎える以前に亡くなつていたと思われる。

(3) 前出 "SUNDAY SCHOOL," MITO

(4) このカード貼は一八九九年南美以年会記録の中で、三戸考案の讚美歌附きカード貼「天使の聲」として報告さ

れる。

(5) 尾崎和夫「人としての三戸吉太郎先生」『神学評論』記
念号（一九三四年一〇月）七一頁

(6) 「童友」の名で著され、J・C・C・ニュートン神学部長の序に著者三戸吉太郎の名が明かされている。十回に分けて子どもたちに神について語りかける内容で、創意工夫された視聴覚教材が随所に使われている（教文館発行 一八九六年）。前出の『日本日曜學校史』四一～四二頁には、三戸が「玉手箱」のように中から様々な材料が出てくる大きなスツケースを持って旅行に出かけ、「それを自由に巧みに使つて、ニコニコものしづかに、細かいところまで行き届いた講演をするのが特長」であつたとの記載がある。

(7) 宇和島で三戸は教会に引きとめられ、異例の六年を過ごすが、「日曜學校の歌」などの子供讚美歌づくりや、エプオース（エーボス）同盟による青年育成などに努める。宇和島での三戸の働きは『日本基督教団宇和島中町教会百年史』に詳述されている。

(8) 一九二二年二月には讚美歌や聖句、「すなごりカード」「泣笑カード」などを収めてカード貼付部分を外した日曜學校手帳のような『天使の聲』（注4の小冊子版か）を發行。奥付に「兵庫県御影町字郡家 日曜學校教材供給所 春光社」とあり、御影教会退任後ハミル館ができ

るまでは、御影の自宅を教材供給所として活動していたものと思われる。

(9) 前出『SUNDAY SCHOOL』MITOより引用。

(10) 三戸の教育観、児童理解に基く思想のメソジスト教会における展開を理解するうえで、日曜学校局長の立場で記した「大成運動と日曜学校事業」『教界時報』一五〇三号（一九二〇年六月一八日発行）の記事が重要となる。

(11) ハミル館における日曜学校教師養成所とはどのようなものだったのかについては、稿末の参考資料「神戸に新設せらるゝ日曜学校教師養成所」を参照。この記事は、日本日曜学校協会の機関誌に載せられた公告に近いものであるが、養成所設置の趣旨、運営状況、関西学院神学部との関わりと実際にそれを担った人々について書かれている。

(12) 生年月日については、一八六六年一〇月二五日（慶應二年九月一七日）とするものがあるが、関西学院の学生名簿では一八六七年一月一七日（慶應三年二月生）の記載が繰り返し返しなされているため、本稿ではこれを採用する。ただし、前出の『SUNDAY SCHOOL』MITOには、受洗が二十二歳の時とあり、ここから遡ると三戸の生年は一八六五年となる。

(13) 吉太郎は、母の姓である住田を名乗り、住田吉太郎と

して関西学院に入学し、在学中の一八九四年八月に三戸ヒデ（秀子）と結婚して三戸吉太郎となる。その間いったん、父の姓の大鶴吉太郎（実兄・大鶴大槌を保証人として、一八九二年の学生名簿に大鶴吉太郎として記載）も名乗っていた。

(14) 開設時は英語科のみで、正規学生五名（中山栄之助、田中義弘、鶴崎庚午郎、松本益吉、蘆田慶治）と数名の予備学生があったとの記録から、三戸は始め予備学生だったのではないかと思われる。三戸の卒業は神学部邦語科。

(15) NCC教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み』（教文館二〇〇七年）三二頁。この年の七月「明治二十六年第七月 南美以教會第貳期日本年會記録」「部局及委員（自明治廿六年 至全二十七年）」の「日曜学校局 會友之部」に大鶴吉太郎として初めて記載（四頁）。同記録の会計支出には、金十六円が大鶴吉太郎へ支出とある（五一頁）。教師補としての記載以前に信徒委員として日曜学校局員として記録に登場し、この日曜学校局での務めは亡くなるまで続けられた。

(16) 一八九五年に「三戸吉太郎の尽力で御影教会の小児日曜学校が再開される」の記載。『すべて神の栄光のために日本キリスト教団御影教会創立百年記念誌』

(17) 『日本基督教団神戸栄光教会百年史』一一〇頁。

- (18) 「明治四二年四月、日曜学校管理法、児童教育学の講師として就任以来熱心^{マツク}神学生指導の任に當りたるものなり。」『開校四十年記念関西学院史』一五九頁。同書巻末表にも「就職年月 明四二、四 退職年月 大 一四、五」と記載され、永眠まで講師とされている。
- (19) 東北での講習会など、この年の三戸の活動については、田村直臣編集発行『ホーム』一卷五、七、一〇、一一号（ホーム社一九二二年）の「日本日曜學校協會會報」欄参照。
- (20) これは米、南メソヂスト監督教会の H.M.Hamill 博士が日本メソヂスト教会に対して日曜学校教師養成学校設立の為の特別献金をしたことに由来し、これを関西学院内に設立すべきとの日曜学校局からの提案だった。これを受け二月六日には日本メソヂスト教会日曜学校局と関西学院理事会との間で「ハミル日曜学校教師養成所」についての合意書が交わされる。『関西学院百年史通史編 I』四〇四〜四〇六頁。
- (21) 夏期学校の内容は『日曜學校』第一号（日本日曜學校協會発行一九一四年）「各派」の報告に記載され、「三戸講師の英雄ヨセフ傳…あり」とされている。
- (22) 『日本基督教団神戸栄光教会百年史』一三九頁。
- (23) ハミル館については、注9と参考資料を参照。養成課程は年間を三期に区分し、実質的なカリキュラムは関西学院神学部がおこなっていた。
- (24) 一九二三年のランバス女学院講師に記録がある。また三戸が「一九二〇年頃、御影より週二回大阪上六のランバスに教えに来ていた」と、日曜世界社、西阪保治は述懐している。『聖和八十年史』二四七〜二四九頁。
- (25) 二月二七日発行『教界時報』一七三九号「消息」欄に記載。家族によれば、客人のために家で「すき焼き」を準備し終えた直後に倒れたという。（三戸吉太郎の孫にあたる山腰牧子さんより筆者聞き取り。二〇一一年一〇月二二日）。
- (26) 病名については、「神学部講師三戸吉太郎脳を患ひて逝けり。」『開校四十年記念関西学院史』一五〇頁とある。
- (27) 一九二六（大一一）年第一九回西部年会記録。
- (28) 前出「人としての三戸吉太郎先生」。
- (29) 『関西学院教会80年史』（日本基督教団関西学院教会二〇〇〇年三月）三〇頁。
- (30) 『関西学院百年史 通史編 I』四〇六〜四〇七頁。（小見のぞみ）